

主 題：いちばん優れているのは愛②

聖書箇所：コリント人への手紙第一 13章5-6節

今私たちが賛美したように、確かに神様は私たちにご自身の平安を下さった。そんなふうにイエス様は言われています。問題は与えられた平安を楽しみながら生きているかどうかです。神様は平安を与えるとわれ、私たちに平安を下さった。世が与えるのとは違うと言われた。問題はそれを持って生きているかどうか、そのすべては私たちがどのように生きているかです。神に従っているならば、私たちは絶対にその平安を経験しながら生きているはずで、なぜならば御霊の実の中に平安が入っているからです。あなたが主とともに歩んでおられるならば、この平安を楽しみながら生きているはずだと。平安ということを考えて、きょう10月11日というのは私にとって特別な日で、ちょうど50年前のきょう、私は初めて教会というところに行きました。ですから10月11日を迎えるたびに何年前だったと思うのですが、きょうはちょうど50年前ということで、その50年を振り返ってみると、やはり同じことが言えるわけで、すべて神様の恵みであり、半世紀、神様はそのように守ってくださった。そういった思いをもって、尊い神様のみことばをきょうも見ていくことができればと思います。

☆愛とはどんなに優れたものか

パウロは13章に入って、もし私たちに愛が欠けているとするならば、あなたの行うことすべては空しいのだということを教えました。

A. 「愛（アガペー）の価値」 1-3節

彼が最初に言ったことは、どんなに多くの言語で話をしたとしても、たとえ天使のことばで話したとしても「愛」がなければ空しいのだということでした。いろいろな国の言葉で話せるというのは素晴らしいことですね。しかし、それが人々から賞賛に値するものであったとしても、「愛」に比べると劣るのだということです。どんなに優れた知識を持って、神様の奥義のすべてを知っていたとしても、またたとえ神の真理のすべてを知っていようと、「愛」がなければそれはみんな空しく、「愛」に劣るものだと。

またある人は「山を動かすほどの完全な信仰」、大変な信仰を持っていたとしても、それらは皆「愛」に劣ると。どんなに大きな犠牲を人々のために払おうと、またたとえ信仰のために殉教を遂げようと、「愛」がなければそれらは神の前に評価されないことなのだと言ったパウロは教えました。

つまりパウロは「愛」の至高さについて教えるのです。「愛」が最も重要で最も価値あるものだとパウロは教えたのです。だからあなたがどんなに熱心に奉仕をされようと、どんなに勇敢にキリストを証ししておられようと、どんなことをしておられようと、それが「愛」に基づいていないならば空しいと。パウロはまずこの13：1-3に神の「愛」であるアガペーの価値というものを明らかにします。

B. 「愛（アガペー）の実体」 4-7節

そして、それを話した上でパウロは4-7節でこの実体を教えました。これは定義ではありませんでした。「愛」とはこういうものだと説明したのではなかったのです。神の「愛」はこういった行いをあなたや私のうちに生み出していくものだというのをパウロは私たちに教えたくれたのです。

1. 「寛容」 4節 箴言17：9、Iペテロ4：8

彼はまず「愛は寛容であり」と言い、「寛容」という行いを生み出していくと教えます。この「寛容」というのは人に対するものです。このことばは短気であることの反対です。困難や苦難に関係なく忍耐を示すとか、その忍耐の中にとどまり続けるという意味を持ったことばです。ですから私たちキリストの愛をいただいた者は、人の悪に対して悪で応じるのではなくて、正しい心を持って、神の前に正しい選択をする。あなたや私はどんな時にでも神がお喜びになることを選びなさいと言うのです。もっと正確に言えば、それを選ぶことができるのだと教えます。

だから「愛」というのは報復、返しをしないことです。箴言17：9でソロモンは人の「そむきの罪をおおう者は、愛を追い求める者。」と書いています。またIペテロ4：8では「愛は多くの罪をおおうからです。」とあります。実はこの「おおう」ということばが大切なことばです。おおいをするというのは、ある物にカバーをかけることです。そうすることによって中の物を外に見せないようにするのです。カバーがかかっていると、何かがあることはわかっていてもそこに何かがあるかわからない。おおいをすることでその物を隠す、それがこのおおうという言葉の意味です。ですから自分に対してなされる、人の罪を赦すだけではなくて、その罪をカバーする。つまりその人の罪を人に言いふらさないということです。あの人には私にこんなことをしたとか、こんなことを言ったとか、自分になされたことをほかの人たちに言いふらすことをしないということです。ソロモンは箴言10：12でも「憎しみは争いをひき起こし、愛はすべてのそむきの罪をおおう。」と言っています。私たちキリストの「愛」、神の「愛」をいただいた者たちは、こ

うして人の罪をおおっていこうとする。確かに悲しいことに人の悪口や人の悪いところをうわさする人たちがいないわけではありません。そういううわさがあなたの耳に入った時、あなたがすべきことはそれをあなたでとめることです。私たちがそういったものを周りの人たちに伝えていかないことだと。「愛は寛容であり」、そういう生き方、そういう歩みを生み出していくものだ。

2. 「親切」

二つ目は「親切」でした。情け深いという意味のあることばです。もっと言えば人が何をするかに関係なく、その人の役に立つことを選択してあなたは行動しなさいということです。人がどんなことをあなたにしたとしても、あなたの責任は「寛容」さをもって、その中でも神がお喜びになることを選択していくことです。同時に私たちはその人にとって役に立つことを考えて行動する。どんな人に対しても「親切」で善意を持って正しい心を持って行動しなさいということです。

人の悪に対して悪で応じないことやどんな人に対してもその人たちの益を考えて行動する、確かにこの二つだけを見ても大変難しいことだと我々は思います。でも考えていただきたいのは、イエス様がそのように歩まれたということです。我々がそのイエス様の歩みを見る時に、いや、イエス様は神だったからできたんだというエクスキューズは通用しないのです。イエス様は完全に神であられたけれども、同時に完全に人でもあられた。何のために私たちに約30年の生活を示してくださったのか——。人としてこのように生きることが主のみこころにかなっていることを私たちに示してくださったのです。

3. 「人をねたみません」 4節

三つ目に出てきたのは「人をねたみません。」でした。人の持ち物に対して、そして自分が持っていないことに関して熱心にそれを得ようとするのです。誰かが持っている物を自分が持っていたら「ねたみ」は出てこないのです。でも誰かが持っていて自分が持っていないと欲しがります。「ねたみ」とはそういうものです。誰かが持っている物に対してどうしてもそれが欲しいと思うこと、それがこの「ねたみ」です。ですから例えば会社であって人が賞賛を受けたとか、昇給したとか、みんなの前で褒められた。自分がそうでなかったら、なぜ自分がその賞賛に値しないのかとねたむのです。ねたむ心を持っているならば人々の成功や幸せに対してひがんでみたり、悪意を持ったりするのです。

「愛」とはそういうことをしないものだと言うのです。自分が人々から認められなくても、人々からいろいろなことを言われたとしても、褒められた人々がいるならば、それを一緒に喜ぶのです。神様はあなたにこういう努力をしなさいと言っているのではないのです。「愛」というのはこういう行いを生み出すのだと言うのです。神はあなたを通してこういう働きをなそうとしていると言うのです。だから最初に見たように、信仰者としての私たちの鍵は、そのようなわざをなしてくれる神にみずからを委ねるのか、それともそんなことが絶対に不可能な自分に頼って生きるのかです。どっちかと言うと、私たちは後者です。自分でやりたいし、自分でできると思っている。そこに私たちの問題があるということです。

4. 「愛は自慢せず」

四つ目は「愛は自慢せず」と書いてあります。立派だ、よくやった、おまえはすごいと自分を必要以上に過度に褒めることを私たちの肉はとて喜びます。それがこの自慢です。なぜこんなことをするかというと、人が自分より勝っていると「ねたみ」を抱くのです。だから私たちは人より自分が勝っているとみんなに示したいのです。

5. 「高慢になりません」 5節

しかし、「愛」というのは自分を過度に褒めることをしないし、5番目「高慢になりません」と続きます。「高慢」というのはプライドで膨れ上がった状態です。うぬぼれているのです、思い上がっているのです。ですからこの「愛」というのは「高慢」にならない。つまり「愛」というのは逆にその人を謙虚にしていくのです。なぜかと言うと、もう説明するまでもありませんけれども、神を愛する者として成長すると、自分自身が見えてきます。聖書を通して神がどんな方なのかを学んでいき、神のことを知れば知るほど、神はあなたや私を我々ひとりひとりに示してくださる。言い方をかえれば、神の目にどんなふう映っているのか、あなたや私の姿を私たちに示してくださる。そうすると、自慢できると思っていたこと、誇れると思っていたことが実はそうでないことに気づかされていきます。我々は何を誇ります？この世の地位も財産も同じように私たちはこの地上に置いていくのです。神を知れば知るほど、神が私たちの本当の姿を示してくださり、我々は本当の自分を知れば知るほど神のこの一方的な恵みに圧倒されるのです。なぜこんな私をこんなにも愛してくださったのかと。

6. 「礼儀に反することをせず」 5節

六つ目に出てきたのは、「礼儀に反することをせず」でした。無作法な振る舞いや失礼な振る舞いをしないということです。そういうことから考えたら私たちはこの世の人々よりも高い基準を持っているのです。どんなふうにも人に接するのかをよく注意しながら我々は接しなければいけない。なぜなら私たちはキリストを代表するのです。どうもキリスト教会の中に入り込んできた間違いというのは、我々クリス

チャンだから何をしても許されるみたいな、恵みや愛を誤解してしまっている。「愛」というのはこの世の人々よりも礼儀を尽くそうとするのです。礼儀に反することをしないのです。社会的、道徳的な基準を無視して、そういったものを軽視して行動しないということです。

最近、ある人がこの世の中の人の方がクリスチャンよりも立派だと、そういう表現を使われました。なぜなら世の中の人の方が人としてしっかりルールや礼儀を守っている。そういうのを聞くと恥ずかしくなりません？彼らは自分のために生きているのです。我々信仰者は神のために生きているのです。私たちは神に喜んでいただくとして選択をしながら生きるのです。パウロは、「愛」というのは「礼儀に反すること」をしない、我々は人としてもしっかり責任を持って歩んで行く者たちだと教えます。

7. 「自分の利益を求めず」 5節 Iコリント10:24、ピリピ2:21

そして、きょう私たちが見ていくのは、7番目、5節に「自分の利益を求めず」と書いてあります。この「利益」ということばは原語にはありません。訳者がこのことばをつけ加えました。英語の聖書を見ても、「自分自身」とか「自分自身の欲」とあります。確かに原語を見ると、自分自身を求めずとか自分自身の道を求めずと訳すことができます。パウロがここで何を教えるかということ、「愛」というのは自分自身を求めない、つまり自己中心的な生き方を求めないということです。自分のしたいことに専心しようとする、自分のしたいようにする、自分の好きなように生きていくと。我々はそうやって生きてきたのです。でも救いにあずかることによって、その生き方が一変したのです。自分のために生きる人生から、私を造り、私を救ってくださった神のために生きる人生です。そのように生まれ変わった私たちは当然神のために生きようとするのですが、同時に我々は人々のためにも生きるのです。ですから喜んで人々のために犠牲を払おうとするのです。

救いにあずかることによって、人生の中の優先順位が一変したでしょう？救われる前の優先順位の常にトップにあったのは自分ではないですか？自分が幸せになるために何をするか？自分が満足するために何をするか？自分が喜ぶために何をするか？常に自分ばかりを考えていた。でも救いにあずかることによって、私を造ってくださった神、私を生かしてくださっている神、そして私を罪から救ってくださった神のために生きていこうと。「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」(ルカ10:27)私の神を愛する、次に私たちの隣人を愛するようになる。自分が出てくるのはその後です。もう少し言うと、自分を愛することに私たちのすべての問題があるのです。でも我々が神を愛し、隣人を愛するならば、見ていただくと、その戒めの中で最も大切なのは神を愛することと記されていて、隣人を愛することが記されていて、そして最後にその後で自分を愛しなさいとは言っていない。なぜなら言われなくても自分を愛するからです。そして先ほどもお話したようにそれが問題なのです。だから隣人を愛する時に必要なのは、自分を愛するように隣人を愛しなさいと。自分のことよりも隣人を優先しなさいと。

コリント教会の問題はそこにありました。豊かな者たちがともに食事を持って集まった時に、食べ物のない人たちがいるにもかかわらず、彼らのことを全く無視して自分たちだけで飲み食いしていた。ですからパウロは誰でも自分の利益を求めないで他人の利益を心掛けなさい、そうしてその愛する者たちのことを自分のことよりも考えなさいと言うのです。ピリピ2:21には「だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。」とあります。だから結局そこに問題があるのです。常に自分が中心にあるのです。常に自分のことばかり考えているのです。だから「愛」というのは「自分の利益を求め」ないことだと。しかも「求め」ということばは現在形で書いてあります。継続して否定するのです。継続してそのように生きないということです。

8. 「怒らず」 5節 マタイ5:22、Iヨハネ3:15、詩篇86:15、箴言12:16

8つ目には「怒らず」と出てきています。「いらだつ」とか「イライラすること」です。人に対して激怒するのです。また怒りっぽいか憤慨しているとか。ここに書かれているのは、人に対する怒りのことです。辞書を見るとこんな説明があります。「愛は人が言ったことに、また行われたことに腹を立てることから守ってくれるのだ」と。もう一度言うと、「愛」というのは自分に対して人が何か言った、また自分に対して人が何か行った、そういうことに腹を立てることから自分を守ってくれると。もちろん、皆さんも何度も失敗してきたように、感情が我々を支配してしまうと私たちは罪を犯してしまいます。しかも感情に支配されないようにと一生懸命心したとしても、あっという間に支配されています。だから私たちは常に神に支配していただくことが必要なのです。神が私たちの心を支配しない限り、私たちの心は防御のないボクシングみたいなもので、打たれっ放しです。

マタイの福音者の中でイエス様がこんなお話をされました。マタイ5:22「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。」と。二度「兄弟に向かって」と書いてあります。一般的に我々は「兄弟」と言ったらクリスチャンたちのことだと考えてしまって、クリスチャンがクリスチャンたちに対してこういうことをし

てはいけないのだという警告であるように思うのですが、この「兄弟」というのはクリスチャンたちに対するものだととるべきではありません。というのはイエス様が公の生涯を始められた時に、聴衆の中にそれほど多くのクリスチャンがいたわけではありません。だからまずそこにいた人々でしょう。そしてもっと言えばユダヤ人たち、同じ民族です。なぜなら聞きに集まって来たのはユダヤ人たちです。そのような人々に対して主は警告をされたのです。

1) 「腹を立てる者」

最初に「腹を立てる者」と言っています。つまり自分にとって嫌なことをする人に対して、人はどういう選択をするかということ、仕返してやろうとするのです。ですからこの「腹を立てる」人というのは誰かが何かをしたとか、誰かが自分のことを言ったことを根に持っているのです。心の中でふつつつと湧き上がってくるような怒りのことです。この人はいつまでもそのことを覚えていて、絶対忘れようとしません。あんなことを言われた、こんなことをされた。私は絶対に忘れないという人のことです。しかもこの怒りというのはいつまでも続くのです。いつまでも恨みを持って決して赦そうとしない。そのような怒りを持っている人に対してイエス様は「兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければ」と言われたのです。そのような歩みに対しては必ず神様からのさばきがあると。

2) 「能なしと言うような者」

二つ目は「兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は」と書いてあります。この「能なし」と訳されているギリシャ語は「ラカ」ということばです。これはアラム語を音訳したのです。意味は「頭が空っぽの人」ということです。つまりこのことばを使うことによってあなたなど無価値だ、取るに足らない、くだらない、愚かな人なのだという意味のあることばです。だから相手を軽蔑する時に使います。ですからある人が誰かを見て、ひよっとしたらその人の社会的地位かもしれないし、その人の家柄かもしれないし、その人の持っている富かもしれないし、知識かもしれないし、学歴かもしれないし、名声かもしれない、容姿からこんな思いが出てくるのかもしれない。いろいろなことを通して、その人物に対して軽蔑を持ってその人を見るのです。その人を軽蔑するのです。悲しいけれども、そういうことを見たことがあると思います。イエス様はそのようなことをする者はさばきを受けるために「最高議会議に引き渡されます」と言われました。

3) 「ばか者と言うような者」

3番目に「『ばか者。』と言うような者」と出てきます。「ばか者」というのは本当に道徳的に愚かな人のことです。神の前を正しく歩んでいるのに、それでもその人たちのことを「ばか者」と呼ぶ、この人は不道徳な者だといった烙印をその人に押すという意味です。その人の名誉を傷つけて、悪意を持ってうそを振りまくような人です。想像していただきたいのは、みんなでお茶を飲んでいて、そういったうわさ話をしてその人の信用を破壊しようとするのです。「ちょっと聞いて、実はあの人はね」と。その人はどうなるかということ、「燃えるゲヘナに投げ込まれます」とあります。「ゲヘナ」というのは地獄です。そこからこの「兄弟」というのは救いにあずかっている者たちだとわかります。主はまだ救いを受けていない者たちに対して警告をしたのです。こういったことを多くの人たちがしていたからです。

見ていただきたいのは、その文脈なのです。今私たちは22節を見たのですが、21節に「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。」とあり、「しかし、わたしは」につながっています。この聴衆たちはこの旧約の教えを聞いていた、知っていたのです。「人を殺しては」いけない、殺したらさばきに遭うと。そう聞いてそう信じていた連中に対して、実はこれが真理なのだと言って、主が主のみこころを教えたのです。人を殺さなくても、人に対して「腹を立てる」存在、心の中で人に対して絶対赦さないという怒りを持っている人、「能なし」と言う人、「ばか者」と言うような人は、まさにここに書かれてあるような人を殺した人と同じだと言うメッセージです。それがこの文脈を通して主が人々にお話しになったことです。だから今我々が見てきたような行為、22節にあった行為はまさに殺人と同じだと言うのです。私たちが考えなければいけないのは、こういったことは神の目に殺人と同じように写っているということです。我々がどう思うかではないのです。さばき主である神が我々に教えてくださるのは、こういう思いを持って歩んでいるのはまさに殺人だということです。

まとめるとこうなります。ある人は自分の感情をコントロールできずに怒りが爆発して、相手を絶対赦そうとしない。相手を赦さないからその人のことを考えると悪口が出てくる。そういうことがあってはならない。「愛」というのはそういう行動をしないということです。なぜそう言えるかということ、私たちに救いを下さった神様はこんな方ではないからです。詩篇86：15が言うように「しかし主よ。あなたは、あわれみ深く、情け深い神。怒るのにおそく、恵みとまことに富んでおられます。」と。また箴言12：16には「愚か者は自分の怒りをすぐ現わす。利口な者ははずかしめを受けても黙っている。」とあります。今我々が見てきたように、「寛容」も「親切」もねたまないことも「自慢」しないことも、「高慢に」

ならないことも、「礼儀に反することを」しないことも、「自分の利益を」求めないことも「怒ら」ないこともどれを見ても我々人間の力では無理です。だから神の「愛」が私たちを通してこのような働きをなしていくのだと教えてくれているのです。なぜならここに見ている「愛」の行動を100%なされた方がひとりだけいるからです。イエス様です。そして私たちは救いにあずかった時からこの方に似た者へと変えられていくのです。

だからパウロは神の「愛」をいただいたあなたはこういう行動を生み出す者になっている、なぜなら神の「愛」があなたのうちにあるからだと言います。イエス様はどんな模範を私たちに示してくださいましたのか——。Ⅰペテロ2：22-23に「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。」、その口から発せられたことばの中に神を汚すような罪は一つもなかったと。そして「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」と続きます。今私たちが見てきたように、人の悪に対して悪でこたえようとするのではなく、主ご自身は人の悪に対して善でもって応答したのです。信仰者の皆さん、あなたも私もこのように生きることが可能だということです。

9. 「人のした悪を思わず」 5節（「人がした悪に心を留めず」（新改訳2017）

9番目に「人のした悪を思わず」と続きます。この「思」うというのは「みなす」とか「評価する」ということばですが、非常に大切なことがここにも記されています。今「思わず」ということばの説明をしましたが、辞書にはこの動詞は「記録を残す」とか「覚える」という意味があるとあります。新改訳聖書2017年版には「人がした悪を心に留めず」と書いてあります。そちらの方がある面ではこの箇所がわかりやすいのです。パークレーはこのことばについてこう説明しています。「この“思う”という語は、会計係の使うことばである。ある事項を、忘れないために、帳簿に記入する、という意味である。」と。忘れないためにそこに書いておくのです。人がした悪に対して、忘れないためにちゃんとそれを書いて残しておくということです。ここにある「人のした悪を思わず」、これは否定です。そういうことをしてはいけないという話です。でも実際私たちはそういうことをしがちなのです。無意識のうちかもしれない。でも我々が忘れましょうという努力をした時、皆さん経験されたと思いますが、我々の記憶は忘れず、ずっと残っているのです。ですから耐えられるうちはいいのですが、限界を超えたら私たちは爆発するのです。その時に必ず出てくるのは、その時になされた悪いことに対して批判するのではなく、ずっと遡ってあの時もこうだった、あの時もこうだったと。言われた本人は何のことを言っているかわからない。忘れてるかもしれない。でも言った本人は覚えているのです。大切なことはその時その時にちゃんと神の前に解決することです。ただ忘れようと努力しただけでは本当の意味の解決にはならないのです。「愛」とは「人のした悪を思わ」ない、「愛」とはそういう人の悪をどこかに書きとどめて忘れないようにしよう、そういうものではない。全部主にお渡ししてその時その時に解決するものだ。

我々が信仰者として日々の生活を歩んで行く上で、確かに難しいことが幾つかあると思います。その中の一つは愛することです。この世的な愛なら大丈夫なのです。感情的でしょう？よくしてくれた時に愛するとか、感情的に何かそういう思いがあればいいけれども、その思いがいつまでも続くわけではない。そうすると、いろいろな不満が出てきたりするのです。私たちはクリスチャンである以上、「愛」ということばを口にしますが、実際神が「愛」して下さったように無条件に愛することができるかという、もう皆さんは無理だと結論を得ていると思います。だから神の助けが要るのです。

優劣をつけるわけではないのですが、もう一つ、赦すことも難しくありませんか？人が自分を赦してくれなければ、あの人は「愛」がないと言ってその赦さない人に対して腹を立てませんか？では自分が赦せるかという、それはかなり条件つきではありませんか？ペテロはⅡペテロ1：5-9でこんなことを言っています。

Ⅱペテロ1：5-9

:5 こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、

:6 知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、

:7 敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。

:8 これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。

:9 これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、。

何を言っているかということ、ペテロも教えようとすることは、こうして私たちは信仰者として成長するということです。9節「これらを備えていない者は」というのは、このように歩んでいない者たち、つまり成長していない者たちのことです。彼らの問題点がここに記されています。「これらを備えていない」ならば、これらの徳がその人の生活に豊かに備わっていないなら、その徳がその人の中で増し加わ

っていないならば、つまり霊的に成長していないとすれば、こんなことが考えられると言うのです。一つ目に言えることは、これはペテロが言っていませんが、聖書が言うのは、救われているかどうかの話です。霊的に救われている人は必ず成長するからです。ここはもう皆さんよくわかりだと思います。問題の二つ目は、成長しない原因はその人の中に罪があるからです。ここにある「近視眼」や「盲目」というのは罪のもたらす悪影響がなすのです。なぜならサタンはイエス様を信じていない未信者の目を「盲目」にしているのです。彼らは救いのすばらしさがわからないでいる。同じように主によって救われた者たちが主からいただいたその祝福がかすんでしまうのです。神がどんなにすばらしいものを私に下さったのか、それがかすむことが、つまりこの「近視眼であり、盲目」なのです。「近視眼」と言ったら遠くのものが見えなくなっているのです。だから霊的な真理が見えなくなっている。「盲目」というのは真理に対して目を閉ざしてしまうのです。霊的なことが見えなくなっている、そういう霊的狀態です。こういう状態に陥っている信仰者はどういうことを経験するかというと、いろいろなことで悩み、いろいろなことに疑いを持ちます。救われたことへの感謝がないだけでなく、救いに関する疑問を抱くのです。だから「自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまった」と書いたのです。つまりかつての自分は死んで主によって洗いきよめられ、新しく生まれ変わったことを忘れてしまっていると。この「忘れ」たというのは、物忘れとか健忘症を受け取ったということです。私たちがどんな祝福をいただき、どんな祝福にあずかったのかを忘れてしまっていると。

私たちは神様がすばらしい罪の赦しを下さったことをもう一度思い出さなければいけない。我々はきょう死んでも天国に行けるのです。皆さん、大丈夫ですか？主は私たちとともにいてくださるのでしょう？我々を助けてくださるのでしょう？あなたの弱さを知ってくださっているんですね？あなたに何が必要か神様はご存じなんですよ？では、救われた私たちは新しい歩みをする人へと生まれ変わったということを覚えていますか？そして新しい歩みをするができるのだということを忘れていませんか？なぜなら多くの人は聖書のみことばを聞いても自分で判断して、これは無理だ、できないと。今私たちが見てきたように、神様が教えてくださっていることをしっかり覚えています？神は私を救ってくださった。それで神の働きは終わったのではないのです。神の働きが始まっているのです。あなたや私を新しく造り変えてくださった神様、新しく造られた者として生きていく働きです。ですからペテロが警告したように、大切なことを忘れてしまっていないか、神が約束してくださったことを忘れていないか、あなたに与えられた祝福を忘れていないかどうか。もしそうだとしたら、もう一度主の恵みをしっかり覚えて、そして大切なことを忘れていたことを主の前に悔い改めることです。

10. 「不正を喜ばず」 6節

10番目に6節「不正を喜ばず」とあります。この「不正」というのは道徳的に正しくないこと、不義です。つまり道から外れる、汚れているということです。これは否定で書かれているわけで、こういった不正を「愛」は喜ばない、言い方を変えれば、「愛」は罪や悪を憎んでいるということです。ソロモンは箴言8：13に「主を恐れることは悪を憎むこと」と言っています。だから主を愛している皆さん、神様はあなたをますます悪を憎む者として成長させてくださる。「わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」と神が言われるのです。神ご自身はどんな悪でも憎むのです。どんな罪でも憎むのです。我々はひよっとしたらこれぐらいはと言って容認するかもしれない。神はどんな罪でもどんな悪でも憎まれるのです。それが神なのです。100%聖い正しいお方なのです。ですからこの方によって救われた私たちは同じように不正や汚れといったものを憎むということです。与えられた神の「愛」というのはそういう行いを生み出していくのです。だから私たちは罪から離れたたい。罪を聞いて、罪に誘われた時に私たちは誘惑を受けないわけではありません。でもその誘惑に乗って罪を犯した時に大變心が責められたことを、皆さん経験されたと思います。なぜかというと私たちは生まれ変わった者であり、この不正を喜ぶ者ではないからです。「愛」というのは「不正を喜ばない」と。

11. 「真理を喜びます」 6節 神の真理 ヨハネ14：6、エペソ4：21、ヨハネ17：17、ルカ15：6、詩篇119：140、163、Iテモテ2：4

そして、6節「真理を喜びます」と対比しています。「愛」というのは「不正を喜ばない」だけではない。かえって「真理を喜ぶ」のだと。この「真理」とは、この世の中の人たちが定義する真理ではありません。神の話です。神ご自身が「真理」であり、神のみことばは「真理」です。イエス様が「わたしが道であり、真理である」と言われたように。だから私たちが持ついろいろな疑問に対して、本当の「真理」を知りたければ、主のところに行くことです。このみことばがそれを教えてくれるのです。エペソ4：21には「ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞き、キリストにあって教えられているのならばです。まさしく真理はイエスにあるのですから。」と書かれています。イエス様は「真理」だと言っているのです。またヨハネ17：17では「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」と。お聞きになったように神が「真理」であり、そして神であるイエス様が「真理」であり、そ

して神様が下さったみことばが「真理」なのだ。

ですから私たちはこのみことばを通して神の「真理」を知り、それを喜ぶのです。だから皆さんが神様のおことばをお聞きになる時に心が喜ぶのです。神のことを聞けば我々の心は「喜び」はねるのです。ですからここで使われている「喜び」、6節の終わりに「真理を喜びます」とあります。これは幸せとか、満ち足りた状態を楽しむという意味です。喜ぶというのはただ何となく喜ぶのではない。本当に自分が幸せであって、本当に満ち足りている、その状態で喜んでいられる様子です。しかもこのことばはほかの人たちと楽しむ、自分ひとりではない、みんなと一緒に楽しむのです。だから「真理」を知りたいと願っている私たちが主の「真理」を知ることによって「喜び」を覚えるのです。

このことばを調べていくと、「真理」の反対は悪事なのです。また人の欺瞞と対比的に記されています。どういうことかということ、人間は罪を犯すゆえに信頼できないけど、私たちは神には信頼を置くことができる。なぜならこの方は絶対に私たちが偽ることがないからです。この方が言われたことは必ずそのとおりになるのです。だから「真理」なのです。

私たちの信仰が皆さんの感情に立ったら、いつも流されます。いつもぐらつきます。しかし我々の信仰はこの神の「真理」であるみことば、聖書に立つのです。神がこう言われた。だから信じているのです。そのような信仰を私たちはしっかり確立させることが必要なのです。詩篇119：163には「私は偽りを憎み、忌みきらい、あなたのみおしえを愛しています。」とあります。神がお用いになった信仰者たちに共通していたことの一つは、間違いなく神のことばを愛するということです。神が我々人間に与えてくださった唯一の、神様からの書物と言えばこの聖書だけです。ここにだけ神の啓示が、メッセージが記されている。だから何千年たっても聖書の中にまだ間違いが出てこない。もっと言えば約2000年前に完成したこの旧・新約聖書は、古い書物でありながらも、現代の私たちを根底から生まれ変わらせることができる力を持っているのです。なぜなら神のことばだからです。だから私たちはこの神の約束に立つのです。

1) 「幸い」 詩篇33：12

私たちは神様から本当の幸せをいただいた者たちです。これはクリスチャンの皆さんがうなずいてくださるはずです。神様は救いにあずかったあなたに神だけが与えることのできる最高の幸せを与えてくださったのです。みことばは言います。「幸いなことよ。」、つまり祝された者よ、「主をおのれの神とする、その国は。神が、ご自身のものとしてお選びになった、その民は。」(詩篇33：12)、この神だけが私たちの本当の幸せをもたらすことのお出来になる方です。幸せの源は神なのです。でも悲しいことに私たちはこの世に生を受けた時から神以外のところに幸せを求めようとするのです。だからだれも見出さないのです。でも感謝なことにそのような私たちに神が一方向的に働いて私たちの目を開いてくださって、神のもとへと導いてくださった。そして私たちは神だけが与えることのできる本当の幸せを得たのです。ですから、その本当の幸せというのは周りの状況に左右されるものではないのです。健康だから幸せ、いいえ健康でなくても幸せなのです。お金があるから幸せ、いや、お金がなくても幸せなのです。

2) 「満足」 IIコリント9：8

そのような確信を持って生きるために聖書に立つのです。神がそう言われたからです。私たちは本当の満足を神様からいただいた。「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることの」、この後のことばが好きです。「できる方です。」(IIコリント9：8)とあります。すごいと思いませんか？最初に見たように、問題はその方を信頼するかどうかです。神様の約束を知っていながらもそのように生きていかなかったら、悲しいことにあなたはそれをいただいているながら、実際にそれを経験し、味わいながらきょうを生きることができません。神様が下さった本当の幸せと本当の満足を持って生きることができるとは、それはその方に頼るかどうかです。

3) 主の近くにいること 詩篇73：28

そんな方の近くにいられること、そんな方が私たちとともにいつもいてくださること、これほどうれしいことはありません。そう思われませんか？ですからパウロは、「真理を喜び」、先ほど私たちが見てきたように「不正を喜ばない」と言うのです。自分自身が気をつけて、自分の口から悪口や人を汚すようなことば、神が耳を覆うようなことばを発しないだけではない。そういうことを憎むだけではない。そういうことを誰かが言っていたら聞くに耐えない、聞きたくないと。そうして私たちは罪や悪を憎むだけではない。神の「真理」を愛して、この神の「真理」に立って生きていくと。それが神の「愛」がなすわざなのです。あなたはそんな人に変えられたのです。感謝しながら、主よ、私はもっとこんな人に変えられたい、どうか私を変えていってくださいと。こうしてみことばは私たちに、神の「愛」はこういう働きをもたらすのだと言うのです。

ご自分がどうなのか、このみことばと照らし合わせた時にいろいろなことをお思いになるでしょう。まだまだだ。そうですよ、私たちはまだまだです。すべてにおいて完璧だと言える人はいないし、もし言う人がいたとしたら、どこかに問題がありますよね。でも少なくとも神はあなたや私をこういう人に変えていってください。我々の祈りは、この神に対する応答は「主よ、私はこんな人になりたい。なぜならこんな人になれば、確実にこんな人に変えてくださっているあなたが私を通して明らかになるから。私のためではない、神様あなたのご栄光のために私をみこころにかなう人に変えていってください」と。どうかその祈りをもってこの一週間も歩んでください。